

CNALレポート・ジャパン

Conferencing industry News report, research & Analysis - CNA Report Japan

創刊：1999年12月

発行日：毎月15日・月末

取材・編集・発行：橋本啓介

テレビ会議/ビデオ会議・Web会議・電話会議システム専門 定期レポート

Vol. 9. No.9 2007年4月30日号

編集:editor@cna.jp 広告:pr@cna.jp 読者登録:<http://cna.jp>

Copyright 2007 CNA Report Japan. All rights reserved.

インタビューレポート

日立電線株式会社



ポリコム社の新製品「Polycom RMX 2000」のリリースに先立ちベータカスタマーに。スイッチの開発、販売ノウハウやIPネットワークの構築実績を活用した大規模なビデオ会議システム導入での実績多数



日立電線株式会社
 情報システム事業本部
 システムエンジニアリングセンター
 クライアントエンジニア第二グループ
 マネージャー 手塚 啓之氏(左)
 松本 正樹氏(右)

聞き手：CNAレポート・ジャパン 橋本 啓介

日立電線株式会社は、電線・ケーブル、情報通信ネットワーク機器、高機能材料の製造販売を主要事業とした

日立グループの中核企業。東京都内の秋葉原UDXに本社。国内に11支店営業所、7工場、物流センタ等、また国内外に傘下の関連会社を持つ。社員数は、連結15,199名(2006年3月期)。売上は日立電線グループ連結で4,250億円(同)。

1918年に日立製作所日立工場(現在の山手工場)内に電線工場を新設、電線及び伸銅品の生産を開始し、1956年に日立電線株式会社として設立現在に至る。東証一部、大証一部上場。

会議システムについては、ポリコム Platinum 認定代理店として、ポリコム社の多地点接続サーバー、ビデオ会議システム、音声会議システムを取り扱っており、「Polycom MGC シリーズ」多地点接続サーバーでは、端末が数百台規模の大規模案件で多数の実績を持つ。

今回 Polycom RMX 2000 発売に先立ち、同製品のベータテストを担当。テスト結果をポリコム社にフィードバックしている。

橋本：御社は、ポリコム社のビデオ会議システムでの大規模実績を多数持つと伺っています。

手塚氏：お陰様で、Polycom MGC シリーズを使った100～1000 端末におよぶ大規模ビデオ会議システムの導入実績においては、当社が国内屈指と考えております。

特にIPベースのビデオ会議システムでは、多数の実績があり、民間企業、大学、研究機関、官庁自治体等のさまざまな業種に対して、端末から多地点接続装置(以下MCUと記載)まで、ビデオ会議システムの設計、構築、そしてサポートまでワンストップで対応しています。

当社では、これまで培ってきた実績とノウハウを結集して、お客様のニーズに合わせたビデオ会議システムをト

ータルにサポートします。

橋本：ビデオ会議システムを社内に構築する場合 MCU が必要になります。

手塚氏：Polycom MGC シリーズは多地点装置という位置付けだけでなく、異なる端末間のインターオペラビリティの問題、インフラストラクチャの問題、利用者の様々な運用問題を吸収し改善してくれる装置です。MCU はユニークな機能を搭載し、多様化する運用のサポートができる会議システムの要としての役割を持っています。

橋本：MCU の基本的な仕組みについて簡単に説明していただけますでしょうか。

松本氏：MCU の基本的な機能は、複数の拠点にあるそれぞれのビデオ会議端末から送られてくる映像や音声を、MCU 内に取りこんで、利用シーンに応じた映像や音声データを全ての接続端末に向けて配信します。最近では、ビデオ会議端末から映像を選択要求できる機能も搭載されています。これによって、各拠点の参加者が1つの会議室にいるかのような会議ができます。

MCU の開発には非常に高度な技術力が必要で、動画をスムーズに処理する回路構成など大変複雑に出来ています。

それらを処理するものの中心には、DSP (Digital Signal Processor) と呼ばれる、パソコンにおける CPU にあたるものがあります。CPU 性能が低いパソコンでストリーミングや映像コンテンツを再生したりアプリケーションで処理したりすると映像のコマ落ちや音声の途切れが発生しますが、それと基本的には同じ考えで、MCU は映像という非常に負荷の高いデータを扱うため搭載されている DSP は高性能なものを実装しています。ただ、パソコンと違うのは、膨大な映像データを処理するため DSP が多数使われている点です。

橋本：DSP に対する負荷は年々上がっていると伺っています。

松本氏：ビデオ会議システム全般に言えることですが、ビデオ会議が使用する帯域が数メガ以上にもなってきたこと、ここ 3、4 年で新たに H.264 という映像符号化方式の実装、そして、4CIF や HD (ハイデフィニション) などの高解像度、また、さまざまな新しい機能が実装されるなどで、処理が高度且つ複雑になってきているため、DSP の処理負荷は急激に高まっています。



Polycom RMX 2000

橋本：Polycom MGC シリーズに加え、今回ポリコムジャパンから新たに Polycom RMX 2000 が発表になりました。

手塚氏：Polycom MGC シリーズがビデオ会議システムを支えてきたのは言うまでもなく、それに加え新たに新製品 Polycom RMX 2000 が発表されるようになったのは、いくつか理由があります。NGN (Next Generation Network) ・IMS (IP Multimedia Subsystem) 対応、従来製品を超える信頼性、拡張性、多様化する運用への対応、管理機能の対応等があげられます。

従来の Polycom MGC シリーズは、多地点機能だけではなく、スケジュール用データベースが MCU 内に実装されており、運用管理に工数がかかっていましたが、Polycom RMX 2000 はオンデマンド型なので運用管理面でのコスト削減が可能になります。

Polycom RMX 2000 は、使用帯域に関係無くポート数が確保されて(1シャーシで80ポートまで)、リソース管理という観点でも、シンプルな設計になっています。さらに価格面でも、従来に比べ格段にポート単価が下がっております。

橋本：これまでの Polycom MGC シリーズと Polycom RMX 2000 との違いはどこにありますでしょうか。

松本氏：Polycom MGC シリーズは、ISDN や ATM 回線などの公衆網を前提に設計され、IP 網にも対応した装置です。日本では、ブロードバンドの急増に伴う劇的なネットワークインフラの変化により、広域接続についても通信事業者のイーサネット専用線サービスが一般的です。

当社のビデオ会議システム納入実績においても、ここ4-5年はIPネットワークでの導入が大半を占めます。

今回新たに発売される Polycom RMX 2000 は、IP ネットワークでの使用に最適化された設計であり、今後ますます増加する IP ネットワーク環境において、色々なビジネスシーンで柔軟な対応ができる製品だと考えています。

また、従来の Polycom MGC と比較して、映像の追従性、輪郭などの鮮明さ、フレーム数等格段に向上しています。特に CP(Continuous Presence)による分割映像については、従来の Polycom MGC と比較し半分程度の遅延であり、個々の画像についても非常にスムーズだと感じています。

さらに、Advanced TCA 規格の採用により、システムとは独立したハードウェアのモニタリング機能等、信頼性の面においては非常に優秀であると評価をしています。

橋本：御社は、Polycom RMX 2000 のベータテストカスタマーということを知っています。

手塚氏：Polycom RMX 2000 のベータテストカスタマーは、世界で9社、アジアでは当社1社になります。当社が Polycom RMX 2000 のベータテストカスタマーに選ばれた理由は、下記の3点によるものと考えます。

①ネットワーク機器製造メーカーであり、SQA(ソフトウェア・クオリティ・アシュアランス)機能を持ち、厳しい物作りの視点で Polycom RMX 2000 の品質を見る能力。

②今まで培われた国内トップクラスの Polycom MGC シリーズの導入実績と有用な顧客を持っている。

③常に顧客の抱える問題や要求する機能などをポリコムに言い続けてきており、一次代理店の立場からポリコムと一体となって良いものにしようと一緒に取り組んできた姿勢。

テストは、昨年12月から当社評価ルームに、100台程度のSD/HD端末を用意して、フィールドで経験した数々の運用形態を模擬したテストを実施して、それをポリコム社にフィードバックすることで正式出荷に向け協力させて頂いております。

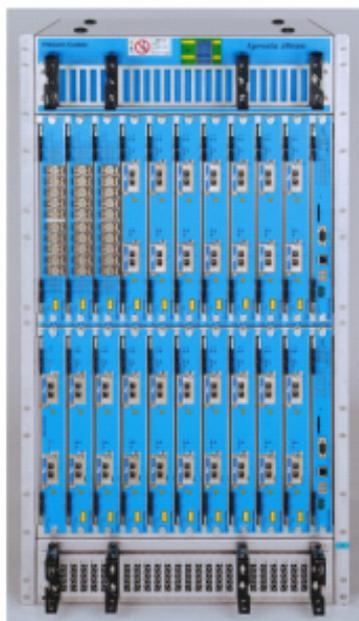
橋本：導入後のサポート体制について教えてください。

松本氏：当社では、Polycom RMX 2000 のリリース時期に併せて、コールセンターなどの一次切り分け対応やEメールによる技術問い合わせなどを含めたサービスメニューの拡充を予定しております。これを実現するために、TAC(Technical Assistance Center)、品証部門などのバックヤードについても強化を実施しております。

ポリコムでは日本国内のサポート強化を目的として、昨年11月に最先端の検証施設を備えた「接続検証センタ」を東京に開設しました。この接続検証センターは、米国ポリコム本社が開設する世界で3番目のセンターで、米国内にある他2ヶ所のセンターと連携して新製品のレビュー、実機を用いた相互運用性のテスト、拡張性のテスト、及び比較テストが可能です。これらのテストにより、自社製品の操作性を改善し、他社製のシステムとシームレスに統合できることを検証します。

当社は、ポリコムプラチナパートナーとして接続検証センターと綿密に連携を取りながら、お客様に十分なサポート体制を提供させて頂く考えです。Polycom RMX 2000

の販売開始は、2007 年前半になる予定です。



APRESIA シリーズ

橋本：IP ネットワークでビデオ会議システムを構築、導入する上でのポイントは何でしょうか。

手塚氏：ネットワークの構築からビデオ会議システムのインテグレーション、そして導入後のサポートまでをワンストップで対応できるインテグレータを選定すべきです。

当社は、2000 年からポリコム製品を販売してきました。この当時のビデオ会議は、ISDN 主流でしたが、当社ではブロードバンドインターネットの到来を早くから予想し 2003 年に FireWall ソリューションとして H.323 ゲートウェイ Througata (スルーゲート)を開発しました。さらに、2004 年には、企業などを中心にビデオ端末の大量導入が始まり、運用管理コストを削減するために Polycom MGC シリーズを誰でも簡単に操作できる運用管理ソフトウェア「ConferenceNavigator (カンファレンスナビゲータ)」を開発しました。

私どもは常に時代のニーズを捉え、必要な物は自ら開発してお客様へ提供してきました。

そもそも当社は、ビデオ会議システムを販売するだけではなく、APRESIA (アプレシア) シリーズ(写真)と呼ばれるスイッチングハブを開発しているネットワークベンダーです。

ネットワーク機器ベンダーとして 20 年以上の実績があり、国内スイッチングハブ市場で上位にランクされています。

APRESIA シリーズには、通信事業者向けとエンタープライズ向けのラインナップがあり、規模やニーズに合わせた製品を提供しております。



APRESIA シリーズ

また、ハードウェアとソフトウェアの開発製造を全て国内で実施しており、品質と信頼性には自信を持っています。

IP による大規模なビデオ会議システムを構築するためには、スイッチ、配線を含むネットワーク全体のパフォーマンスなどを理解する必要があります。単にビデオ会議システムをネットワークにつなげばよいというわけではありません。

何故ならば、帯域不足によるパケットの遅延・パケットロスが映像・音声に影響を及ぼし正常なビデオ会議を開催できないからです。

当社はこれまでに培った多くの事例から、お客様のニーズに合わせた最適なビデオ会議システムを、設計から構築、そして導入後の運用サポートまでを一貫してご提供する事が可能です。

また、今後は広帯域の IP 網を利用してビデオ会議システムを活用することで、これまでのような単なるビデオ会議としての利用という枠に止まらず、画像や動画といったコンテンツを共有することで企業ビジネス・教育・医療・福祉・行政・自治体等の幅広い分野で活用することが可能となります。

こういった幅広い利用形態に対してお客様の個々のニーズに対して的確なシステムをご提供していくことが、ビデオ会議システム提供ベンダーには求められてきています。

橋本：有り難うございました。

連絡先：

日立電線株式会社
情報システム事業本部
事業企画部

TEL: 03-5256-3194

FAX: 03-5256-5462

E-mail: [msp@mailto:mail.hitachi-cable.co.jp](mailto:mspu@mail.hitachi-cable.co.jp)

WWW: <http://www.hitachi-cable.co.jp/>

新製品サービス情報

ポリコムジャパン、NGN に対応し
AdvancedTCA を採用した多地点接続サーバー
を発表



Polycom RMX 2000

ポリコムジャパン株式会社(東京都千代田区)は、次世代アーキテクチャを採用し、導入から管理まで容易に行える多地点接続サーバー「Polycom RMX 2000」リアルタイムメディア会議プラットフォームを発表した。

Polycom RMX 2000 は、IP ネットワーク上で、多地点でのビデオ会議や、映像、音声、コンテンツを組み合わせたユニファイド会議を可能とし、導入、運用、管理の全てを簡単に行えるソリューション。Polycom ReadIconvene シリーズや Polycom MGC シリーズなども組み合わせたり、IP 電話やプ

レゼンスサーバーなども統合が行える。

SIP と H.323 に対応。キャリアグレードの通信端末向け次世代標準規格 AdvancedTCA を採用し、NGN(次世代ネットワーク)の核技術となる IMS(IP Multimedia Subsystem) に準拠している。

映像解像度は、HD(ハイデフィニション)に対応しているとともに、CIF、SD/4CIF もサポート。HD、SD、CIF など異なる解像度の映像を分割して表示でき、ビデオ会議の品質は、各参加者が使う端末の機能に応じて個別に最適化される仕組みを提供する。

PRI(ISDN INS1500 相当)インターフェイスカードにより、一般電話回線や VoIP 経由の音声通話をサポートし、音声会議システムや形態電話から会議に参加するということも可能。一般電話回線や VoIP のみの通話を含み最大 400 ポートまで対応。

LinuxOS をベースに設計されているため、XML API を提供することで、会議予約アプリケーションなど、他社製の会議用アプリケーションにも対応する。また、セキュリティ機能には、LDAP や Active Directory などの外部データベース経由でのユーザー認証や全てのポートに AES による暗号化を行えるほか、複数レベルでの権限設定が可能。モジュラー型デザインで、ホットスワップに対応するため、インテグレーション、保守、アップグレードなどが容易に行える。

また、今回エンドユーザーによる操作性を向上させる新機能「Advanced Click & View(アドバンスド・クリック&ビュー)」を搭載。Advanced Click & View によって、参加者は会議中に柔軟に表示画面を調整できる。たとえば、新しいユーザーが会議に参加すると、画面が自動的に最適な表示設定に調整されるが、Polycom RMX 2000 は、ユーザーの選択によって定義済みの固定画面レイアウトを切り替えて、最大 16 拠点まで同時に表示できる。そして、カスタマイズフォーマットや HD やテレプレゼンスに対応したフォーマットなども提供されている。

サポートされる言語は、日本語を始め、英語、中国語、

韓国語、ドイツ語など 12 カ国語に対応している。

Polycom RMX 2000 は、インストールウィザード、自動システム監視及び標準の Web インターフェイスを採用しているため、導入から管理・運用、そして会議設定まで管理者の負担を軽減するとともに、それに伴うコスト削減も可能とした。

会議については、オンデマンドで簡単に行え、定期的に繰り返し行う会議はプロファイル設定をするだけで毎回個別に設定を行う必要はない。また、ユーザーはカレンダーアプリケーション、「Polycom ReadManager SE200」のスケジュール機能などから会議の通知を送信するだけで会議を設定できる。

Polycom RMX 2000 のサポートサービスについては、認定販売代理店を通して導入、運用、保守のサポートを提供する。ネットワークの評価とネットワークを最適化するためのコンサルティングサービスである「ネットワーク アセスメント サービス」や、システムのダウンタイムを最小限に抑えてスムーズに運用に入るための、インストールの事前評価、現地でのインストール作業、導入時トレーニングを含めた、導入から設置までのプロジェクト管理を総合的に行う「インプリメンテーション サービス」を提供する。

Polycom RMX 2000 の価格は発表時(4月26日現在)未定だが、出荷時期は、2007 年前半にポリコム認定代理店より販売される予定。

ポリコムジャパン、データ共有機能付き液晶モニター一体型低価格ビデオ会議システムを発売

ポリコムジャパン株式会社(東京都千代田区)は、カメラ、マイク、スピーカーを内蔵した低価格ビデオ会議システム「Polycom V700」を4月16日に発売。Polycom V700 は、既発売の「Polycom VSX 3000」をベースに機能をしばって低価格化を実現した製品。

「在宅勤務者や企業の個人席での使用に最適なデザイン。PC のモニターとしても使用可能なため、机上のスペースを有効に使うことができる。」(ポリコムジャパン)

Polycom V700 は、PC モニターとして利用できる 17 インチ液晶ディスプレイと、カメラ(モニター上部中央)、ステレオ

マイク(カメラを挟んで左右2カ所)、スピーカー(モニター下部左右2カ所)を統合したオールインワン型のシステムで、ハードウェアの追加なしで PC データなどのコンテンツを送信できる「People+Content IP」データ共有ソフトウェアが標準で付属されている。



Polycom V700

通信は、IP (H.323/SIP) を標準としており、最大帯域幅(通信速度)は、768kbps で 30 フレーム秒、また、上位機種でもサポートされている、4CIF 解像度や H.264 映像符号化方式、Siren14 StereoSurround による 14Khz の広帯域ステレオ音声などを提供している。

また、暗号化にも対応、サポートされている言語は、日本語や英語を含め 16 言語。IP 環境用途向けのため、通信時の映像補正や音声補正機能もある。

Polycom V シリーズには、V700 の他にモニターに取り付けて使用する「Polycom V500」個人用型ビデオ会議システムがあるが、V シリーズの製品コンセプトとしては、上位機種の Polycom VSX シリーズビデオ会議システムと同じソフトウェアプラットフォームで設計されており、ビジネス用途で必要な映像と音声品質を提供しながら、個人用途環境で必要な機能のみを厳選して製品化、そして低価格化を実現した製品。

加えて、既発売のポリコムの各製品、Polycom VSX、

Polycom HDX、Polycom RPX やビデオ会議ネットワーク管理システムなどの全てのポリコムソリューションと組み合わせてもお互いビデオ会議通信が行えるとともに、業界標準に対応する他社のビデオ会議システムとも基本的に通信は可能だ。

本体(幅/高さ/奥行き)は、436mm/476mm/177.8mm。重さは、9.1kg。

Polycom V700は、4月16日以降ポリコム認定販売代理店を通じて販売されている。メーカー希望小売価格は、57万8000円(税別)。

NTT アドバンステクノロジー、マイクロフォン・スピーカー一体型ハンズフリー装置発表



RealTalk C7

NTT アドバンステクノロジー株式会社(東京都新宿区)は、マイクロフォンとスピーカーが内蔵されたハンズフリー装置「RealTalk C7(リアルトーク C7)」を発表、5月7日より販売開始する。

RealTalk C7は、マイクは、本体上部、スピーカーは本体前面に内蔵されている。周波数帯域は、100Hz から 7kHz までサポート。PC とは USB 接続、テレビ電話はアナログライン端子(RCA ピンジャック)による接続が可能で、さらに電話機に直接接続して電話会議用のスピーカーマイクとしても使える。

重さは 930g で、外形寸法は、約 120mm(W) x 約

189mm(W) x 約 223mm(H)。「オールインワンタイプでコンパクトな装置のため、狭い打ち合わせスペース等でも邪魔にならず、容易に使用が可能だ。」(NTT アドバンステクノロジー)

NTT サイバースペース研究所で開発された最新のエコーキャンセラー・ノイズリダクション技術及び方向別AGC(オートゲインコントロール)技術を搭載。「騒がしいオフィスでの使用でもエコーとノイズを抑えて快適な通話が可能。装置から少し離れた参加者の小さな声も、装置に非常に近い参加者の大きすぎる声も、方向別に自動で音量を調整できる。」(NTT アドバンステクノロジー)

同社は、これまで RealTalk シリーズとして、Web 会議用の「RealTalk 71」、テレビ/Web 会議用「RealTalk 72」、CD 帯域のステレオ音声に対応した「RealTalk ST」といった単体のエコーキャンセラーを販売してきたが、今回のマイクロフォンとスピーカー一体型「RealTalk C7」は、シリーズ初となる製品。

また、RealTalk シリーズには加えて、ノイズリダクション付き高性能音響エコーキャンセラー・ライブラリ「RealTalk ライブラリ」も提供している。

RealTalk C7 の価格は、88,000 円(税抜き)。担当部門は、同社メディア事業部メディアインテグレーション事業ユニットエコーキャンセラー担当。

クレッソン研究所、価格を抑えた PC インターネットテレビ会議システムイントラパック版を発売

株式会社クレッソン研究所(大阪府大阪市)は、同社が提供するインターネットテレビ会議システム「ViVoCo(ビボコ、Visual Voice Communication)」が、マイクロソフトの OS Windows Vista に対応したとともに提供価格を抑えたイントラパック版 5 ID パックを 4 月より販売開始したと発表。

ViVoCo は、ジャパンメディアシステム株式会社(東京都千代田区)の Live On をベースに開発されたシステム。インターネット上で動作しソフトをインストールすることなく、

指定された URL にアクセスするだけで簡単に会議が行える。

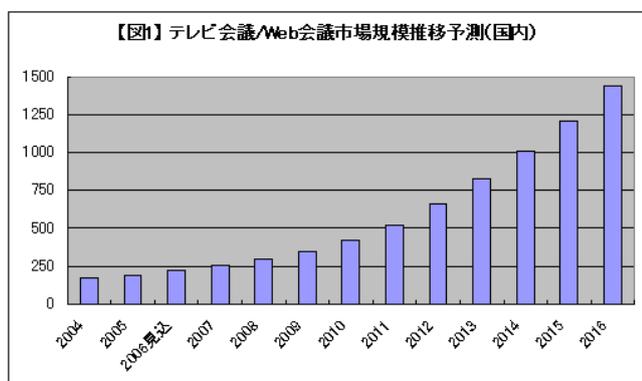
同社では、2006 年 9 月から ViVoCo を提供してきたが、今回販売開始した製品は、従来のイントラパック版の機能を全て提供しながらも、利用人数は少ない中小企業向けに、同時利用者数を限定し価格を抑えたシステム。

ViVoCo の主な機能としては、ホワイトボード、資料共有、アプリケーション共有、メッセージ送信、ファイル送信、文字チャット、録音録画、音声優先帯域調整など。アプリケーション共有機能は、マイクロソフト Excel、Word、Powerpoint など始めた Windows アプリケーションに基本的に対応している。その他では解像度の向上が図られた結果、ビデオ表示サイズが、今までの倍の 640x480 を選択することが可能となった。

基本的構成としては、サーバー(筐体)とクライアントライセンス数 5 ID、そして初年度保守料込みで、198 万円(消費税)から。

マーケット状況

シード・プランニング、2007 年版会議システム調査レポート発行、国内テレビ会議市場は、2016 年には 1,400 億円市場へ、2010 年頃にはテレビ会議販売は SD タイプから HD タイプへ逆転すると予想



調査コンサルティング会社である株式会社シード・プラン

ニング(東京都台東区)は、テレビ会議、ウェブ会議システムに関する市場調査を行い、それをまとめた調査研究レポート「2007 年版 TV 会議/Web 会議の最新市場と HD 化動向」を今年 3 月に発行した。

同社では、テレビ会議、Web 会議、電話会議の動向について 2003 年以降毎年調査してきた。取り扱ってきたテーマは、映像コミュニケーションの製品動向、メーカ戦略、市場規模、メーカシェア、導入ユーザーアンケート調査、中国のテレビ会議動向などがある。

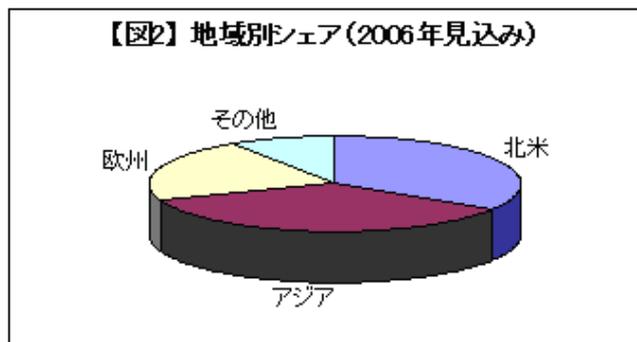
今回のレポートでは、各メーカ及びサービス提供事業者(80社)を取材調査し、主要プレーヤーの参入や製品(端末、MCU など)・サービス(多地点サービスなど)、そして昨今業界で注目を浴びる HD 化やテレプレゼンスを含めた今後の動向を中心にまとめた。そして、その取材調査した企業のうち45社の個別分析も掲載。それに加え、今後動向が注目されるテレビ会議のHD化やテレプレゼンスについてもその動向と見通しについても言及している。

今回のレポートのポイントをいくつか挙げると、まず全体的な傾向としては、2004 年時点のテレビ会議(専用端末)、Web 会議、音声会議システム国内市場は 169 億円規模であったが、2016 年の市場規模は、1,400 億円に拡大すると予測。

2004 年時点では市場規模の6割弱がテレビ会議システムで、会議システム市場では最大のセグメントとなっている。そのテレビ会議システムの今後の市場成長については、伸び率は小さいが今後も増加すると見られている。また、それに対してパソコンタイプ(Web 会議ソフトウェア、ASP サービス)は、2007 年以降急速に増加し、2009 年にはパソコンタイプが専用端末タイプを逆転すると同社では予測している。

2003 年に 100 億円弱であった国内のテレビ会議システム市場に対して、世界市場は日本市場の約 10 倍。世界市場は特に 2002 年から 2003 年に大幅に伸びた。この伸びは中国市場が牽引。2006 年世界での地域別市場では中国を含むアジアと北米が3割以上と大きく、日本は 1 割

未満である。メーカーシェアでは、ポリコム社が台数、金額とも世界、国内ともに最大のシェアを持つ。日本市場に目を転じると、2位はソニーで、ポリコム、ソニーで9割弱に達する状態。この傾向はここ数年変わっていない。



Web 会議システムの新規参入状況については、2001 年は 4 社参入があったが、2002 年、2003 年と大幅に増加した。その後参入数は、年々減少し 2006 年の新規参入は、1 社のみとなった。パソコンタイプは撤退企業も出てきており、淘汰が始まっていると見る。Web 会議では、パソコンタイプと ASP サービスの 2 種類に分類できるが、今後は欧米並に ASP サービスが増加すると予測。

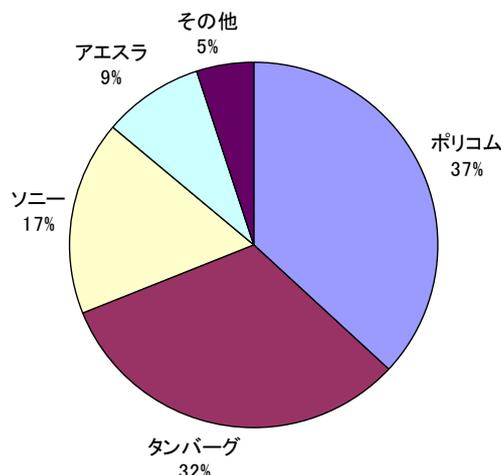
HD 対応のテレビ会議システムは、2006 年に LifeSize が専用端末タイプで販売を開始し、その後各主要メーカーが順次発売。国内の専用端末タイプでは、製品の HD 化対応は 4 割に達したが、それに対し Web 会議系ではこれから(PC の CPU 向上にもよる)。今後テレビ会議は HD 化され、テレプレゼンスのように高額なリアルテレビ会議システムと、より安価で簡単に行える Web 会議の 2 極化が進むと見ている。

SD テレビ会議システムから HD テレビ会議システムへの移行時期については、時間を要すると見るが、2010 年頃には SD と HD 端末の販売転換点が来ると予測する。

独 VTRON 社、2006 年第 4 四半期ドイツ・オーストリア、スイス 3 国テレビ会議専用端末市場状況発表 (Marketzahlen DACH Region 4. Quartal 2006!)

ドイツのテレビ会議専門のマーケット調査及びコンサルティングを行う VTRON 社が 2006 年第四四半期(10 月-12 月

期)のドイツ、オーストリア、スイス3国のテレビ会議専用端末市場の状況について、同社発行のテレビ会議専門誌「Videoconferencing In Europe 2007/2/28 号」にて発表した。同誌は、ドイツ語で執筆されたテレビ会議専門誌で毎月月末に1回無料で発行されている。



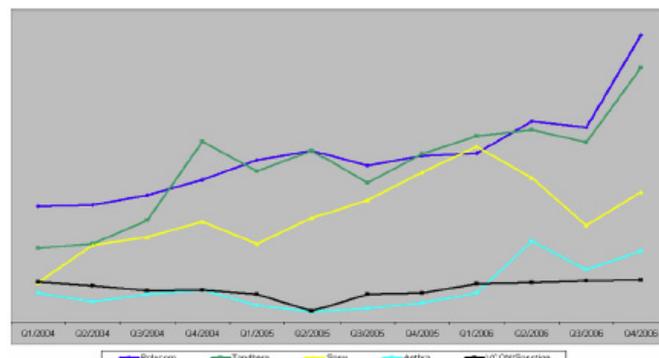
VTRON 社調査：ドイツ・オーストリア、スイス 3 国の 2006 年第四四半期(10 月-12 月期)

今回発表された内容によると、2006 年第四四半期は、同社が調査開始した 2004 年以降最高の出荷台数を記録した四半期となった。

ポリコム、タンバークの 2 社間の競争は激しいが両社とも四半期、通年ともに好調な結果だった。

ソニーは、年率 20% の成長を記録し、アエストラは、2005 年若干弱含みの年だったが、2006 年は新製品の投入もあり販売は着実に回復してきている。

その他のメーカーで特筆すべき点は、LifeSize 社。他のメーカーに比べ市場では新参ではあるが、市場では確実に地場を固めつつある状況だ。



VTRON 社調査：2004 年第一四半期から四半期毎に時系列

で各社のシェアの変動をみたグラフ。青：ポリコム、緑：タンバーク、黄：ソニー、水色：アエスラ、黒：その他

記事元：

Videoconferencing In Europe 2007年2月28日号
Marketzahlen DACH Region 4. Quartal 2006!
http://www.vtron.de/VTRON_News_0207.pdf



VTRON GmbH

<http://www.vtron.de>

セミナー・展示会情報

次世代コミュニケーションフォーラム

日時:5月16日9:00~18:20
場所:ウェスティンホテル東京(目黒)
主催:日経コミュニケーション、日経 NETWORK
協力:日経コンピュータ、ITpro
詳細:<http://ac.nikkeibp.co.jp/ncc/ncf07/>

Telepresence World 2007

日時:6月4日-6日
会場:University of San Diego(米加州)
主催:Hemisphere Expo Services, Inc.
詳細:<http://www.telepresenceworld.com/>

WR Collaboration Summit 2007,San Francisco, CA USA

会期:6月5日-7日
会場:The Holiday Inn Golden Gateway(アメリカ、サンフランシスコ)
主催:Wainhouse Research, LLC
詳細:<http://www.wainhouse.com/sanfran07/>

編集後記

日々CNA レポート・ジャパンへのご協力、ご支援ありがとうございます。

今号もお読みいただきましてありがとうございました。来月号では、新製品に関する記事やレポート、海外セミナーレポート、海外の専門誌の翻訳記事などを予定しております。

社内勉強会、スポンサー広告サービスなど募集しておりますので宜しくご検討お願い致します。

CNAレポート・ジャパン 代表 橋本啓介